

アンサンブル・ アンテルコンタンポランの歩み

笠羽映子 (早稲田大学教授)

Text by Eiko Kasaba

アンサンブル・アンテルコンタンポラン (以下EIC) は、20世紀後半以降の欧米芸術音楽界の代表的作曲家・指揮者ピエール・ブーレーズ (1925~2016) によって傑出した演奏家を集めて1976年に創設された現代音楽演奏集団である。1950年代終わり頃から1960年代を通じ、フランスの保守的な音楽環境に抗してドイツに拠点を移し、指揮者としても欧米各地で活躍するようになっていたブーレーズは、1970年、当時のフランス大統領ジョルジュ・ポンピドゥーから、パリ中心部に構想中のポンピドゥー・センターに付属する

現代音楽関連施設の創設——音楽とテクノロジーが連携したIRCAM^{イールカム} [音響・音楽連携研究所] として1977年に開所した——を要請され、故国に戻ってきたのだった。研究所の構想段階から、彼は研究と音楽創造活動を結びつけ、広く世界の新作を演奏するために、また20世紀の古典と最新の作品との繋がりを聴衆に示すためにも、安定した雇用条件のもとで気鋭の演奏家を集めたグループが必要だと考えていた。こうして当時の閣外文化相ミシェル・ギーの支援と、ロンドン・シンフォニーエッタの共同創設者でもあったニコラス・

アンサンブル・アンテルコンタンポランの歩み

スノーマンの協力を得て、31名(木管楽器各2+バス・クラリネット1、金管楽器各2〔チューバのみ1〕、ヴァイオリン3、ヴィオラ2、チェロ2、コントラバス1、鍵盤楽器3、ハープ1、打楽器3)からなるアンサンブルが誕生し、この編成は現在も変わっていない。統計学的に、この編成でかなり広いレパートリーをカバーできるといえる。EICはフルタイムの3分の2を基本とした月給制を取っていて、メンバーは一定の生活基盤を保障されつつ、アンサンブル以外の活動もでき、視野を広められるような形となっている。

創設者ブーレーズには当初大きく3つの目標があった。第1の目標は、20世紀前半のレパートリーを完全に自分たちのものにする事で、音楽言語の変遷を音楽家たちのみならず、聴衆がより良く把握するためにも不可欠とブーレーズは考えたのだ——シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンを始めとした諸作品は20世紀後半になっても、優れた演奏で度々聴衆に提供されては来なかったし、現在もそうした状況がクリアされているとも言えない——。第2の目標は、新しい現代的な作品を発見し、時間的な余裕を持って練習が出来る環境で演奏家が作品に親しめるよう方向づけ、新作を繰り返してプログラムングすることである。第3の目標は、楽器とテクノロジーとの関係づけで、演奏家が技術者や作曲家と協力して新たな創造に取

り組むことであり、IRCAMという公的な機関があってこそ実現可能となった目標である。さらに教育に関連した第4の目標もあったが、これはパリ北東部にコンサートホールを含むシテ・ド・ラ・ミュージックが建設され、1995年にEICが拠点をそこに移して以降、隣接する国立高等音楽院とも連携して実現、多様に展開されるようになってきている。

当初の2年間は、ブーレーズが音楽監督としてほぼすべての重責を担っていたが、その後は総裁となり、ペーター・エトヴェシュ〔1979～1991〕、デイヴィッド・ロバートソン〔1992～2000〕、ジョナサン・ノット〔2000～2005〕、スザンナ・マルッキ〔2006～2013〕が音楽監督を務め、2013年以降現在に至るまでマティアス・ピンチャーがその任にある。年間約70回に及ぶ演奏会はフランスばかりでなく、海外でも行われ、また指揮者を必要としない室内楽演奏会も多い。結成20周年を記念した演奏会プログラムに、約1400作品をレパートリーにしていると記されているが、さらに20年以上を経た今日ばかりに増えているだろう。ペリオ、リゲティ、クセナキス、ライヒ、カーターなどの著名作曲家や、新進作曲家の新作初演リストには感嘆を禁じ得ない。

1992年ブーレーズは公職を退き、EICでは名誉総裁(IRCAMでは名誉所長)となったが、各方面での助言を惜しまず、また聴

衆を魅了する傑出した指揮者として、85歳を過ぎて緑内障の手術を受けた2011年まで、進んでEICの指揮台に立った。さらに、2003年、ルツェルン・フェスティヴァル総裁ミヒャエル・ヘフリガーとルツェルン・フェスティヴァル・アカデミーを創設し、世界各国から100名を越える新進音楽家を集めて現代音楽に特化したプログラムを3週間にわたって学習する企画を立ち上げた際にも、EICのメンバーはコーチとして全面的に協力し、若手音楽家の育成に努めた。アカデミーにブーレーズが姿を見せたのは2013年が最後だが、その10年間にわたる教育活動から、世界へ羽ばたいていった作曲家、指揮者、演奏家も大勢いる。

発足以来40年以上を経た今日、メンバーの交代も当然ながらある。相当長く在籍している音楽家もいれば、他の活動を目指していった逸材もいる。今や世界のトップピアノ奏者のひとりピエール・ローラン・エマールはEIC創設時のメンバーだし、ミヒャエル・ヴェンデベルクのようにEICで5年間ピアノ奏者を務めた後、ドイツに戻って指揮を習得、現在では指揮者・ピアノ奏者として活躍している人物もいる。クテュリエの前任者ジャン＝ギアン・ケラスについてはもはや語るまでもない。EICの活動を通じて自分の道を自覚し、さらに素晴らしい創造的な音楽活動を続けていくことは、EICに深く根付いた精神でもあるのだろう。



エリック＝マリア・クテュリエ (チェロ)

©Luc Hossepied

ドイツにおけるアンサンブル・モデルンや、オーストリアにおけるクラングフォルム・ヴィーンのモデルのひとつともなつたと言われるアンサンブル・アンテルコンタンポラン。良い意味でブーレーズの薫陶の賜物でもあったアンサンブルは、彼の没後2年を経た今日、ある意味で活動の岐路に立っているのかもしれない。ルツェルンのプロジェクトからEICとその音楽監督ピンチャーは手を引いた。またアンサンブルはフランス文化・通信省やパリ市、その他の組織から助成を得ているが、そうしたことも今後の活動次第だろう。メンバーたちが気概を持って、果敢に新たな道を切り拓いていくのを期待しつつ見守りたい。